

Glocal Imaginaries Conference 参加報告

高島美和

2009年9月9日から11日までイギリス、ランカスター大学で開催された Glocal Imaginaries Conference に出席した。ランカスターはイングランドの北西部に位置し、産業革命より長らく栄え続けてきたイギリス3番目の大都市マンチェスターから電車で30分ほど離れた場所にある小さな町である。その小さな町にあるランカスター大学でおこなわれた本学会は、ランカスター大学とマンチェスター大学の共催でおこなわれ、助成金を受けて2007年から2009年までの3年間の続くプロジェクトとして運営されてきた。

本学会名には、少し注意を喚起したい。“Global”ではなく、“Glocal”である。決して、つづりの間違いではない。この用語はここ数十年前から使われるようになった言葉であるが、global と local という単語から作られた言葉である。グローバル化した社会においてもそのローカル性は切り離せないということであろうか。さらに、テーマは“Writing / Migrant / Places”ということで、多文化が織りなす社会について学際的な研究を深めることである。そのため、個人の研究発表だけでなく、開催中毎日午前と午後それぞれ一回ずつ基調講演が行われた。

このようなコンセプトから明らかなように、発表者、参加者ともにイギリス人に限らず、スペイン人、アメリカ人、台湾人や日本人など各国からの参加者も目立った。なかでもかつての統治国であったインド人の参加者の数はひときわ目立っていた。彼らの多くは、インドで高等教育機関に所属している人たちであったが、彼らが今回の学会で発表する契機につながったのは、かつて統治されていた時代に移民としてインド人やパキスタン人たちが、マンチェス

ターに多く移り住んでいたという歴史的な背景があったためであろうと推測される。また、マンチェスターには今でも巨大なインド人コミュニティがあり、独特なインド文化が根付いているという現状も見逃せないのではなかろうか。

参加者の人種が多様だっただけでなく、学会プログラムの内容也多岐にわたっていた。Glocal City、Migrant and Diaspora、Moving Story、Queer Glocalist、Gendering Diaspora、Black Atlantic など、分科会のタイトルを見ただけでも、その内容の多様さがうかがえるのではないだろうか。さまざまな研究発表を聴講したが、中でも印象に残ったのはスペイン出身の発表者が、アメリカで活躍するドミニカ出身の二人の作家 Annecy Báez と Junot Diaz の作品を取り上げ、ドミニカ人移民の1世、2世、3世達が、ドミニカ人たちが本来持っているジェンダー規範に翻弄され、自己規定や自己実現にもがく姿が描かれている作品を取り上げているものであった。

発表者は、まず初めに、Annecy Báez の作品を取り上げ、そこに現れる「女性像」の表象分析を試みた。発表者によると、主人公の女性は、アメリカに移り住み、夫との間に娘をもうけたが、移民であることの差別を受け、夫の仕事がうまくいくことはない。しかし、その苦境を乗り切るため、主人公は、生きていくための術を模索する。その苦しい人生に立ち向かう姿を見て育った娘は、自らの人生も切り開いていこうとする力を見せながら、成長していく。

一方で、Junot Diaz の作品においては、「男性像」を分析する。前者と同じように、男性主人公のアメリカでの辛い境遇に焦点が当てられる。ただ、異なる点は、男性主人公は、いわ

ゆる「男らしさ」という固定観念に翻弄され、新しい境遇でうまく生活を行うことができず、辛い日々を経験する。その主人公の息子は、アメリカで生まれ、育ったために、新しい（つまり父親達の世代とは異なった）社会規範、ジェンダー規範つまりは「男らしさ」を身につけて成長していく。そこに、父親と息子の相容れない思想の隔たりが起こり、父と息子の不幸な日々が続いていく。また、このような父の規範の押し付けとアメリカ的な規範の間で、息子は自己実現を困難にしていく。

これらの二作品における親子関係の描写は決して、小説の中の作り事ではないと、発表者は説明する。発表者によると、アメリカに移民したドミニカ人たちは、他の中南米からの移民たちとは違って、ドミニカでは裕福な暮らしをしていた家族が多いという。彼らの母国での仕事は、医者や弁護士などいわゆる社会的地位のある職業についている人たちだということだ。そんな彼らは、アメリカに渡ることによって、さらに裕福で自由な暮らしを可能にすると希望を持っているが、現実には、思っていた以上に厳しいものであると確認するだけだった。男性は社会的地位のある職に就いているからこそ、ドミニカで培った規範以外のものを受け入れることが困難になる。また、その規範と人間的誇りを父から息子へとある意味「教育」することによって、若い世代のドミニカ出身アメリカ人たちは、家族とのつながり学校での教育や人間関係に問題を抱えるという。一方、女性は柔軟性をもって新しい環境にも対処していこうとする力が備わっていると言えそうだ。

今学会ではいくつかの発表を聞いたが、どの研究にも共通する主題は、もちろん移民や人種であった。しかし、その問題はただ単に人種の問題だけでなく、ジェンダーの問題が複雑に絡み合っていることがとても感じられた。そして、そのジェンダーの問題は、社会においてのみ問題になるのではなく、教育現場での人間育成とまた家庭での両親の子育てにも深くかかわっ

ているということが感じられた。3 日間で 43 もの分科会に分かれて行われた学会であったため、もちろんすべての研究発表を聴講できたわけではないが、十数の研究発表を聞いたことによって、ジェンダーの問題、人種の問題が海外ではどのように扱われつつあるのかということを経験するいい機会であったことは間違いない。